

## 第 1 回コンソーシアム協議で挙げられた課題

## 〈協議内容〉

障がい者の生涯学習が推進されるために必要なこと（課題）は何か。

## 1 構成員

- ① 「ピュアフレンズ事業」の参加者のほとんどは、長年参加しているおなじみのメンバーである。活動をサポートするボランティア（大学生など）も参加しているが、学生は卒業するといなくなってしまうため、継続して手伝ってくれる人を集めるのが難しいという課題がある。
- ② 市内の障がい者施設などを回って新しい参加者を募集しているが、なかなか増えないのが現状である。
- ③ 継続して参加してもらうためには、参加する側だけでなく、サポートする側のボランティアを集め、育てていく仕組み作りも必要である。

## 2 構成員

- ① 生涯学習課の事業はインクルーシブを目指しているものの、障がい者の実際の参加は少ない。広報不足、交通の問題が大きな障壁となっている。
- ② 障がい者のイベントであっても、職員の送迎がないイベントにおいては、参加者が1～2名に激減してしまう。交通の便の問題と現場での合理的配慮への不安感が主な原因と考えられる。
- ③ 当事者のニーズが本当に存在しているのか、それとも把握できていないのか不明な点もあり、参加につなげる仕掛けや工夫が必要である。
- ④ 施設のパン教室で障がい者を対象として企画したところ、多数の応募がありすぐに定員に達した実績から、体験活動に参加したくても、参加できないと感じている障がい者が多いのではないかと推測される。
- ⑤ チラシやポスター、SNSでの告知だけでは伝わりにくい実態がある。

## 3 構成員

- ① 高齢者向けのサロン活動などは活発だが、それを担うボランティアが高齢化しており、後継者不足も深刻である。
- ② 一生懸命活動している人が辞めてしまうと、その活動自体がなくなってしまうこともあり、無理なく長く続けられる仕組みや、新しい人が参加しやすい環境づくりが今後の課題である。

## 4 構成員

交流会について、参加者が意見を出し合って「こんなことをやってみたい」と話し合うが、私たちがその要望に合った情報（どこに行けばそれができるのかなど）をうまく提供できず、実現に至らないことがある。

## 5 構成員

相談窓口が保健師や障がい福祉課となり相談先が限られているため、生涯学習に結び付けるまでの間の機関をどうつなげるか、その連携と広報が課題である。

## 6 構成員

- ① 手をつなぐ育成会では、秋にソフトボール大会を行っており、学校の先生にも協力してもらっている。しかし、担当の先生が異動などで替わってしまうと、後任を探すのが難しく、継続が困難になる。また、サッカーなどの他のスポーツもやりたいという要望があるが、指導者を見つけるのが難しい。
- ② 地域の公民館などで活動しようとしても、施設の利用ルールが厳しかったり、他の利用者との調整が難しかったりして、活動場所を確保するのに苦労している。障がいのある人が気軽に利用できる場所や仕組みづくりが必要だと感じている。

## 7 構成員

- ① 健常者が障がい者に教えるという意識ではなく、できる人ができない人に教えるという「意識のスライド」が必要であるという点である。
- ② スポーツ分野でも同様の考え方が通用する。例えばアスリートであれば、障がいの有無を問わず、自身が持つ知識を広めたい、教えたいという意識があり、双方にとって有益な Win-Win の関係が成り立つ。こうした人材を積極的に繋ぎ、コーディネートしていくべきである。
- ③ ねむのきアートフェスタで障がい者の発表の場が不足しているという意見を受け新たに発表の場を提供した。ただし、今後はねむのき会館に場を限定せず、公民館などの社会教育資源を大いに活用して地域の拠点とし、小さい単位でも地域での生涯学習活動を積み重ねていくことで、障がい者の生涯学習は進展するのではないかと感じている。
- ④ そこにある課題に対して「人、物、金」が必要なことは皆わかっていることだが「ないからできない」という議論に留まらず、「できるために何を獲得する必要があるか」を皆さんで知恵を出し合うことが、青森県の障がい者の生涯学習を前進させるカギになると考える。

座長は、第1回協議の意見をまとめると、課題は大きく以下の3つに整理できるとした。

- (1) 生涯学習情報の収集及び発信の方法について
- (2) 活動を支える人財（ボランティアや指導者）の確保や育成について
- (3) 活動場所の確保と継続した学びの場の提供をする方法